現代文藝評論全集（四）

[illegible]

[illegible]

二葉亭四迷集

現代文豪名作全集

河出書房

二葉亭四迷集

現代文豪名作全集　第十一回配本

昭和二十八年八月一日　初版印刷　定價　二八〇圓
昭和二十八年八月五日　初版發行　地方定價　二九〇圓

著者　二葉亭四迷
編集者　中村光夫

東京都千代田區神田小川町三ノ八
發行者　河出孝雄
東京都中央區入舟町二ノ三
印刷者　永井直保

檢印不要

發行所　株式會社　河出書房
東京都千代田區神田小川町三ノ八
電話神田(25)三一七四番

永井印刷工業株式會社印刷・小高製本

目次

浮雲……三
其面影……一〇八
平凡……三三〇
あひゞき……二九三
奇遇……三〇〇
片戀……三二四
肖像畫……三六三

四日間……四〇六
血笑記……四一六
茶筅髪……四二六
年譜……四八一
解説……中村光夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

二葉亭四迷集

浮雲

浮雲はしがき

薔薇の花は頭に咲く活人は繪となる世の中獨り文章而已は微の生えた陳腐の四角張りたるに頓返しを附けかね又は舌足らずの物言を學びて口に涎を流すは抽し是はどうでも言文一致の事だと思立ては矢も楯もなく文明の風改良の熱一度に寄せ來るどさくさ紛れお先眞闇三寶荒神さまと春のや先生を頼み奉り缺硯に朧の月の雫を受けて墨摺流す空のきほひ夕立の雨の一しきりさら〳〵さつと書流せばアラ無情始末にゆかぬ浮雲めが艶しき月の面影を思ひ懸なく閉籠て黑白も分かぬ烏夜玉のやみらみっちやな小說か出來しぞやと我ながら肝を潰して此書の卷端に序するものは

明治丁亥初夏　二葉亭四迷

第一編

第一回　アヽラ怪しの人の擧動

千早振る神無月も最早跡二日の餘波となッた廿八日の午後三時頃に、神田見附の內より、塗渡る蟻、散る蜘蛛の子とうよ〳〵ぞよ〳〵沸出でゝ來るのは、孰れも顯を氣にし給ふ方々。しかし熟々見て篤と點檢すると、是れにも種種類のあるもので、まづ髭から書立てれば、口髭、頬髯、顎の鬚、暴に興起した拿破崙髭に、狆の口めいた比斯馬克髭、そのほか迷鶏髭、絡髭、ありやなしやの幻の髭と濃くも淡くもいろ〳〵に生分る。髭に續いて差ひのあるのは服飾。白木屋仕込みの黑物づくめには佛蘭西皮の靴の配偶はありうち、之を召す方樣の鼻毛は延びて蜻蛉をも釣るべしといふ。是れより降つては、背皺よると枕詞の付く「スコッチ」の背廣にゴリ〳〵するほどの牛の毛皮靴、そこで踵にお飾を絶さぬ所から泥に尾を曳く龜甲洋袴、いづれも釣しんぼうの苦患を今に脫せぬ貌付、デも持主は得意なもので、髭あり服あり我また奚をか覓めんと濟した顏色で、火をくれた木頭と反身ッてお歸り遊ばす、イヤお羨しいことだ。其後より續いて出てお出でなさるは孰れも胡麻鹽頭、弓と曲げても張の弱い腰に無錢や空辨當を振垂げて

タヨタものでお歸りなさる。さては老朽しても流石はまだ職に堪へるものか、しかし日本服でも勤められるお手輕なお身の上、さりとはまたお氣の毒な。

途上人影の稀れに成つた頃、同じ見附の内より兩人の少年が話しながら出て參つた。一人は年齡二十二三の男、顏色は蒼味七分に土氣三分、どうも宜敷ないが、秀た眉に儼然とした眼付で、ズーと抑徹つた鼻筋、唯惜哉口元が些と尋常でないばかり。しかし締はよささうゆゑ、繪草紙屋の前に立つても、パックリ開くなどゝいふ氣遣ひは有るまいか。兎に角顯が尖つて頰骨が露れ、非道く癘れてゐる故か顏の造作がとげ〳〵してゐて、愛嬌氣といつたら微塵もなし。醜くはないが何處ともなくケンがある。背はスラリとしてゐるばかりで左而已高いといふ程でもないが、痩肉ゆゑ、半鐘なんとやらといふ人間の惡い渾名に緣が有りさうで、年數物ながら摺疊皺の存じた霜降「スコッチ」の服を身に纏ッて、組紐を盤帶にした帽檐廣な黑羅紗の帽子を戴いてゐ、今一人は、前の男より二ッ三ッ兄らしく、中肉中背で色白の丸顏、口元の尋常な所から眼付のパッチリとした所は仲々の好男子ながら、顏立がひねてこせ〳〵してゐるので、何となく品格のない男。黑羅紗の半「フロックコート」に同じ色の「チョッキ」、洋袴は何か乙な縞羅紗で、リウとした衣裳附、絲の卷上ッた釜底形の黑の帽子を眉深に冠り、左の手を隱袋へ差入れ、右の手で細々とした杖を玩物にしながら、高い男に向ひ、

「しかしネー、若し果して課長が我輩を信用してゐるなら、蓋し已むを得ざるに出でたんだ。何故と言ッて見給へ、局員四十有餘名と言やァ大層のやうだけれども、皆腰の曲ッた老爺に非ざれば氣の利かない奴ばかりだらう。其内で、かう言やァ可笑しい樣だけれども、若手でサ、原書も些たァ嚙つてゐてサ、而して事務を取らせて捗の往く者と言つたら、マァ我輩二三人だ。だから若し果して信用してゐるのなら、已を得ないのサ。」

「けれども山口を見給へ、事務を取らせたら彼の男程捗の往く者はあるまいけれども、矢張兎を喰つたぢやァないか。」

「彼奴はいかん、彼奴は馬鹿だからいかん。」

「何故。」

「何故と言つて、彼奴は馬鹿だ、課長に向つて此間のやうな事を言ふ所を見りやァ、蜘〳〵馬鹿だ。」

「あれは全體課長が惡いサ、自分が不條理な事を言付けながら、何にもあんなに頭ごなしにいふこともない。」

「それは課長の方が或は不條理かも知れぬが、しかし苟も長官たる者に向つて抵抗を試みるなぞといふなァ、馬鹿の骨頂だ。まづ考へて見給へ、山口は何んだ、屬吏ぢやァないか。屬吏ならば、假令ひ課長の言付を條理と思つたにしろ思はぬにしろ、ハイ〳〵言つて其通り處辯して往きやァ、職分は盡きてるぢやァないか。然るに彼奴のやうに、苟も課長たる者に向つてあんな差圖がましい事を……」

「イヤあれは指圖ぢやアない、注意サ。」
「フム乙ら山口を辯護するネ、矢張同病相憐れむのか、アハアハ〳〵。」
高い男は中背の男の顏を尻眼にかけて口を鉗むで仕舞ッたので談話がすこし中絶れる。錦町へ曲り込んで二ッ目の横町の角まで參つた時、中背の男は不圖立止つて、
「ダガ君の兒を喰たのは、弔すべくまた賀すべしだぜ。」
「何故。」
「何故と言つて、君、是れからは朝から晩まで情婦の側にへばり付てゐる事が出來らアネ。アハ〳〵〳〵。」
「フ、ン、馬鹿を言給ふな。」
ト高い男は顏に似氣なく微笑を含み、さて失敬の挨拶も手輕るく、別れて獨り小川町の方へ參る。顏の微笑が一かは一かは消え往くにつれ、足取も次第〳〵に緩かになつて、終には蟲の這ふ樣になり、悄然と頭をうな垂れて二三町程も參ッた頃、不圖立止りて四邊を回顧し、駭然として二足三足立戻ッて、トある横町へ曲り込んで、角から三軒目の格子戸作りの二階家へ這入る。一所に這入ッて見よう。
高い男は玄關を通り拔けて緣側へ立出ると、傍の坐舖の障子がスラリ開いて、年頃十八九の婦人の首、チョンボリとした摘ッ鼻と、日の丸の紋を染拔いたムックリとした頰とで、その持主の身分が知れるといふ奴が、ヌット出る。
「お歸なさいまし。」
トいつて、何故か口舐ずりをする。

「叔母さんは。」
「先程お嬢さまと何處らへか。」
「さう。」
ト言捨てゝ高い男は緣側を傳つて參り、突當りの段梯子を登ッて二階へ上る。玆處は六疊の小坐舖、一間の床に三尺の押入れ付、三方は壁で唯南ばかりが障子になッてゐる。床に掛けた軸は隅々も既に蟲喰んで、床花瓶に投入れた二本三本の蝦夷菊は、うら枯れて枯葉がち。坐舖の一隅を顧みると古びた机が一脚据ゑ付けてあッて、筆、ペン、楊枝などを摑挿しにした筆立一個に、齒磨の函と肩を比べた間の硯が一面載せてある。机の側に押立たは二本立の書函、是には小形の燭缶が載せてある。机の下に差入れたは緣の缺けた火入、是れには摺附木の死體が横ッてゐる。其外坐舖一杯に敷詰めた毛團、衣紋竹に釣るした袷衣、柱の釘に懸けた手拭、いづれを見ても皆年數物、その證據には手擦れてゐて古色蒼然たり、だが自ら秩然と取旁付てゐる。
高い男は徐かに和服に着替へ、脫棄てた服を疊みかけて見て、舌鼓を擊ちながら其儘押入へへし込んで仕舞ふ。所へトバクサと上ッて來たは例の日の丸の紋を染拔いた首の持主、横巾の廣い筋骨の逞しい、ズングリ、ムックリとした生理學上の美人で、持ッて來た郵便を高い男の前に差置いて、
「アノー先刻此郵便が。」

「ア、さう、何處から來たんだ。」
ト郵便を手に取つて見て、
「ウー、國からか。」
「アノネ貴君、今日のお孃さまのお服飾は、ほんとにお目に懸け度やうでしたヨ。まづネ、お下着が格子縞の黄八丈で、お上着はパッとした宜引縞の糸織で、お髪は何時ものイボジリ捲きでしたがネ、お掻頭は此間出雲屋からお取んなすつたこんな」
と故意〳〵手で形を拵らへて見せ、
「薔薇の花掻頭でネ、それは〳〵お美しう御座いましたヨ……私もあんな帶留が一ツ欲しいけれども……」
……と些し寒いで、
「お孃さまはお化粧なんぞはしないと仰しやるけれども、今日はなんでも内々で薄化粧なすつたに違ひありませんヨ。だつてなんぼ色がお白ツてあんなに……私も家にゐる時分は是れでもヘタクタ施つたもんでしたがネ、此家へ上ツてからお正月ばかりにして不斷は施けないの、施けても いゝけれども御新造さまの惡口が厭ですワ、だッて何時かもお客樣のいらッしやる前で、「鍋のお白粉を施けたとこは全然炭團へ霜が降ッたやうで御座います」ッて……餘りぢやア有りませんか、ネー貴君、なんぼ私が不器量だッて餘りぢやアありませんか。」
ト敵手が傍にでもゐるやうに、眞黑になつてまくしかける。
高い男は先程より、手紙を把ッては讀かけ讀かけてはまた下へ措きなどして、さも迷惑な體、此時も唯「フム」と鼻を鳴らした而已で更に取合はぬゆゑ、生理學上の美人は左なくとも罅壞れさうな兩頰をいとゞ膨脹らして、ツンとして二階を降りる。其後姿を目送ッて高い男はホット顏、また手早く手紙を取上げて讀下す、その文言に
一筆示しそろ、さても時こうがら日增しにお寒う相成り候へども御無事にお勤め被成候や、それのみあんじくらしそろ、母事も此頃はめつきり年をとり、髮の毛も大方は白髮になるにつき心まで愚痴に相成候と見え、今年の晩には御地へ參られるとは知りつゝも、何となう待遠にて、毎日ひにち指のみ折暮らしそろ、どうぞ〳〵一日も早うお引取下され度念じそろ、さる廿四日は父上の……
と讀みさして覺えずも手紙を取落し、腕を組んでホット溜息。

第二回　風變りな戀の初峯入　上

高い男と假に名乘らせた男は本名を内海文三と言ッて靜岡縣の者で、父親は舊幕府に仕へて俸祿を食だ者で有ッたが、幕府倒れて王政古に復り時津風に靡かぬ艮草もない明治の御代に成ッてからは、舊里靜岡に蟄居して暫らくは儉食の民となり、爲すこともなく昨日と送り今日と暮らす内、坐して食へば山も空しの諺に漏れず、次第々々に貯蓄の手薄になる所から足掻き出したが、偖木から落ちた猿猴の身といふものは意久地の無い者で、腕は眞陰流に固ッて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

ゐても鋤鍬は使へず、口は左樣然らばと重く成ッてゐて見れば急にはヘイの音も出されず、といつて天秤を肩へ當るも家名の汚れ外聞が見ッとも宜くないといふので、足を擂木に匙剋ッて辛くして靜岡藩の史生に住込み、ヤレ嬉しやと言ッた所が腰辨當の境界、なか〳〵浮み上る程には參らぬが、デモ感心には多くも無い資本を吝まずして一子文三に學問を仕込む。まづ朝勃然起る、辨當を背負はせて學校へ出て遣る、歸ッて來る、直ちに傍近の私塾へ通はせると言ふのだから、あけしい間がない。迚も餘所外の小供では續かないが、其處は文三、性質が內端だけに學問には向くと見えて、餘りしぶりもせずして出て參る。尤も途に蜻蛉を追ふ友を見てフト氣をぐれて遊び暮らし、消然として裏口から立戻ッて來る事も無いではないが、其は邂逅の事で、マ、大方は勉强する。其內に學問の味も出て來る、サア面白くなるから、昨日までは督責されなければ取出さなかッた書物をも今日は我から繙くやうになり、隨ッて學業も進歩するので、人も賞讃せば兩親も喜ばしく、子の生長に其身の老るを忘れて春を送り秋を迎へる內、文三の十四といふ春、待に待た卒業も首尾よく濟だのでヤレ嬉しやといふ間もなく、父親は不圖感染した風邪から餘病を引出し、年比の心勞も手傳てドット床に就く。藥餌、呪、加持祈禱と人の善いと言ふ程の事を爲盡して見たが、さて驗も見えず、次第々々に賴み少なに成て、遂に文三の事を言ひ死に果敢なく成て仕舞ふ。生殘た妻子の愁傷は實に比喩を取るに言葉もなくばかり「嗟、突幾程歎いても仕方がない」トいふ口の下からツイ袖に置くは泪の露、漸くの事で空しき骸を苦提所へ送りて荼毘一片の烟と立上らせて仕舞ふ。さて揖人が沒してから家計は一方ならぬ困難、藥禮と葬式の雜用とに多もない貯叢をゲッソリ遣ひ減らして、今は殘り少なになる。デモ母親は男勝りの氣丈者、貧苦にめげない麦焚の業の片手間に一枚三厘の襯衣を縫けて、身を粉にして揖了ぐに迫付く貧乏もないか、如何か斯うか湯なり粥なりを啜て、公債の利の細い烟を立てゝゐる。文三は父親の存生中より、家計の困難に心附かぬでは無いが、何と言てもまだ幼少の事、何時までも其で居られるやうな心地がされて、親思ひの心から、今に坊が彼して斯うしてと、年齡には增せた事を言ひ出しては兩親に袂を絞らせた事は有ても、又何處ともなく他愛のない所も有て、浪に漂ふ浮艸の、うか〳〵として月日を重ねたが、父の死後便のない母親の辛苦心勞を見るに付け聞くに付け、小供心にも心細くもまた悲しく、始めて浮世の鹽が身に浸みて、夢の覺たやうな心地。是れからは給事なりともして、母親の手足にはならずとも責めて我口だけはとおもふ由をも母に告げて相談をしてゐると、捨る神あれば助る神ありで、文三だけは東京に居る叔父の許へ引取られる事になり、泣の泪で靜岡を發足して叔父を便つて出京したは明治十一年、文三が十五に成た春の事とか。

叔父は園田孫兵衞と言ひて、文三の亡父の爲めには實弟

に當る男、慈悲深く、憐ッぽく、加之も律義眞當の氣質ゆゑ、人の望けも宜いが、惜哉些と氣が弱すぎる。維新後は兩刀を矢立に替へて、朝夕算盤を彈いては見たが、慣れぬ事とて初の内は損毛ばかり、今日に明日にと喰込で、果は借金の淵に陷まり、如何しよう斯うしようと足掻き蹶いてゐる内、不圖した事から浮み上て、當今では些とは資本も出來、地面をも買ひ、小金をも貸付けて、家を東京に持ちながら、其身は濱のさる茶店の支配人をしてゐる事なれば、左而已富貴と言ふでもないが、まづ融通のある活計。留守を守る女房のお政は、お摩りからずる〳〵の後配、歴とした士族の娘と自分ではいふが……チト考へ物。しかし兎に角、如才のない、世辭のよい、地代から貸金の催促まで家事一切獨で切つて廻る程あつて、萬事に拔目のない婦人。疵瑕と言ッては唯大酒飲みで、浮氣で、加之も針を持つ事がキッイ嫌ひといふばかり、さしたる事もないが、人事はよく言ひたがらぬが世の習ひ、「彼婦人は裾張蛇の變生だらう」ト近邊の者は影人形を使ふとか言ふ。夫婦の間に二人の子がある。姉をお勢と言ッて、其頃はまだ十二の蕾、弟を勇と言ッて、是れもまた袖で鼻汁拭く洟垂り（是れは當今は某校に入舍してゐて宅には居らぬので）、トいふ家内ゆゑ、叔母一人の機に入ればイザコザは無いが、さて文三には人の機嫌氣褄を取る抔といふ事が出來ぬ。唯心ばかりは主とも親とも思ッて善く事へるが、氣が利かぬと言ッては脫付けられる事何時も〳〵、其度ごとに親の難有サが身に染み骨に耐へて、袖に露を置くことは有りながら、常に自ら叱ッてヂット辛抱、使歩行きをする暇には近邊の私塾へ通學して、暫らく悲しい月日を送ッてゐる。ト或る時、某學校で生徒の召募があると塾での評判取り〳〵、聞けば給費だといふ。何も試しだと文三が試驗を受けて見た所、幸ひにして及第する、入舍する、ソレ給費が貰へる。昨日までは叔父の家とは言ひながら食客の悲しさには、追使はれたうへ氣兼苦勞而已をしてゐたので、今日は外に掣肘る所もなく、心一杯に勉强の出來る身の上となつたから、ヤ喜んだの喜ばないのとそれは〳〵、雀躍までして喜んだが、しかし書生と言ッても是もまた一苦界、固より餘所外のおぼッちやま方とは違ひ、親から仕送りなどゝいふ洒落はないから、無駄遣ひとては一錢もならず、また爲ようとも思はずして、唯一心に、便のない一人の母親の心を安めねばならぬ、世話になつた叔父へも報恩をせねばならぬ、と思ふ心より、寸陰を惜んでの刻苦勉强に學業の進みも著るしく、何時の試驗にも一番と言ッて二番とは下らぬ程ゆゑ、得難い書生と教員も感心する。サアさうなると傍が喧ましい。放蕩と懶惰とを經緯の絲にして織上たおぼッちやま方が、不負魂の妬み嫉みからおむづかり遊ばすけれども、文三は其等の事には頓着せず、獨りネビッチョ除け物と成ッて朝夕勉强三昧に歳月を消磨する内、遂に多年螢雪の功が現はれて一片の卒業證書を懷き、再び叔父の家を東道とするやうに成ッたからまづ一安心と、其れより手を替へ品を

替へ種々にして仕官の口を探すが、さて探すとなると無いもので、心ならずも小半年ばかり燻ッてゐる。其間始終叔母にいぶされる辛らさ苦しさ、初は叔母も自分ながらけぶさうな貌をして、やは〳〵吹付けてゐたからまづ宜ッたが、次第にいぶし方に念が入ッて來て、果は生松葉に蓄椒をくべるやうに成ッたから、其のけぶいこと此上なし。文三も暫らくは鼻をも潰してゐたれ、竟には餘りのけぶさに堪へ兼て噎返る胸を押鎭めかねた事も有ッたが、イヤ〳〵是れも自分が不甲斐ないからだと、思ひ返してヂット辛抱。さういふ所ゆゑ、其後或人の周旋で某省の准判任御用係となッた時は天へも昇る心地がされて、ホット一息吐きは吐いたが、始て出勤した時は異な感じがした。まづ取調物を受取つて我坐になほり、さて落着て居廻りを視回すと、仔細らしく頸を傾けて書物をするもの、蚤取眼になつて校合をするもの、筆を啣へて忙し氣に帳簿を繰るものと種々さまざま有る中に、恰ど文三の眞向ふに八字の浪を額に寄せ、忙しく眼をしばたゝきながら、間斷もなく算盤を彈いてゐた年配五十前後の老人が、不圖手を止めて珠へ指ざしをしながら、「エー六五七十の二……でもなしとエー六五」ト天下の安危此一擧に在りと言ッた樣な、さも心配さうな顏を振揚げて、其癖口をアンゴリ開いて、眼鏡越しにジット文三の顏を見守め、「ウー八十の二か」ト一越調子高な聲を振立てゝまた一心不亂に彈き出す。餘りの可笑しさに堪へかねて、文三は覺えずも微笑したが、考へて見れば笑ふ我と笑はれる人と餘り懸隔のない身の上。ア、曾て身の油に根氣の心を浸し、眠い眼を睡ずして得た學力を、斯樣な果敢ない馬鹿氣た事に使ふのかと、思へば悲しく情なく、我になくホット太息を吐いて、暫らくは唯茫然としてつまらぬ者でゐたが、イヤ〳〵是れではならぬと心を取直して、其日より事務に取懸る。當座四五日は例の老人の顏を見る毎に嘆息而已してゐたが、其れも向ふ境界に移る習ひとかで、日を經る隨に苦にもならなく成る。此月より國許の老母へは月々仕送をすれば母親も悅び、叔父へは月賦で借金濟しをすれば叔母も機嫌を直す。其年の暮に一等進んで本官になり、昨年の暑中には久々にて歸省するなど、いろ〳〵喜ばしき事が重なれば、眉の皺も自ら伸び、どうやら壽命も長くなつたやうに思はれる。茲にチト艶いた一條のお噺があるが、之を記す前に、チョッピリ孫兵衞の長女お勢の小傳を伺ひませう。

お勢の生立の有樣、生來子煩惱の孫兵衞を父に持ち、他人には薄情でも我子には眼の無いお政を母に持ッた事ゆゑ、幼少の折より揮頭の花、衣の裏の玉と撫で愛まれ、何でも彼でも言成次第にヨイソレと仕付けられたのが癖と成ッて、首尾よくやんちや娘に成果せた。紐解の賀の濟た頃より、父親の望みで小學校へ通ひ、母親の好みで淸元の稽古、生得て才潑の一德には生覺えながら飲込みも早く、學問、遊藝、兩ながら出來のよいやうに思はれるから、母親は眼も口も一ッにして大驩び、尋ねぬ人にまで風聽する

娘自慢の手前味噌、切りに涎を垂らしてゐた。其頃新に隣家へ引移ッて參ッた官員は、家内四人活計で、細君もあれば娘もある。隣づからの寒喧の挨拶が癪付きで、親々が心安く成るにつれ娘同志も親しくなり、毎日のやうに訪つ訪れつした。隣家の娘といふは、お勢よりは二ツ三ツ年層で、優しく溫藉で、父親が儒者のなれの果だけ有ッて、小供ながらも學問が、好こそ物の上手で出來る。いけ年を仕て、兎角人眞似に輟められぬもの、況てや小供といふ中にもお勢は根生の輕躁者なれば、尙更倏忽其娘に薫陶れて、起居擧動から物の言ひざまで其れに似せ、急に三味線を擲却して、唐机の上に孔雀の羽を挿立る。お政は學問などゝいふ正坐ッた事は蟲が好かぬが、愛し娘の爲度と思ッて爲る事と、其儘に打棄てゝ置く内、お勢が小學校を卒業した頃、隣家の娘は芝邊のさる私塾へ入塾することに成ッた。サアさう成るとお勢は矢も楯も堪らず、急に入塾が仕度なる。何でも彼でもと親を責がむ、終言にまで言ッて責がむ。トいってまだ年端も往かぬに、殊にはなまよみの甲斐なき婦人の身でゐながら、入塾などゝは以の外、トサ一旦は親の威光で叱り付けては見たが、例の絶食に腹を空せ、「入塾が出來ない位なら生て居る甲斐がない」ト溜息嘯雜ぜの愁訴、萎れ返ッて見せるに兩親も我を折り、其程までに思ふならばと、萬事を隣家の娘に托して、覺束なくも入塾させたは今より二年前の事で。

お勢の入塾した塾の塾頭をしてゐる婦人は、新聞の受賣からグット思ひ上りをした女丈夫、しかも氣を使ッて一飯の恩は酬いぬがちでも、睚眥の怨は必ず報ずるといふ蚰蜒魂で、氣に入らぬ者と見れば、何蹴につけて眞綿に針のチク〳〵責をするが性分。親の前でこそ蛤貝と反身れ、他人の前では蜆貝と縮まるお勢の事ゆゑ、責まれるのが辛らさにこの女丈夫に取入ッて卑屈を働らく。固より根がお茶ッぴいゆゑ、其風には染り易いか、忽の中に見違へるほど容子が變り、何時しか隣家の娘とは疎々しくなッた。其後英學を初めてからは、惡足掻もまた一段で、襦袢がシャツになれば唐人帽も束髪に化け、ハンケチで咽喉を緊め、襷陶敷を耐へて眼鏡を掛け、獨よがりの人笑はせ、天晴一個のキャッキャとなり濟ました。然るに去年の暮、例の女丈夫は、教師に屈はれたとかで退塾して仕舞ひ、其手に屬したお茶ッぴい連も一人去り二人去して殘少なになるにつけ、お勢も何となく我宿戀しく成ッたなれど、正可さうとも言ひ難ねたか、漢學は荒方出來たと拵へて、退塾して宿所へ歸ッたは今年の春の暮、櫻の花の散る頃の事で。

既に記した如く文三の出京した頃は、お勢はまだ十二の蕾、巾の狹い帶を締めて、姉様を荷厄介にしてゐたなれど、こましやくれた心から、「彼の人はお前の御亭主さんに貰ッたのだヨ」ト坐興に言ッた言葉の露を實と汲だか、初の内ははにかむでばかり居たが、小供の馴むは早いもので、間もなく菓子一を二ツに割ッて喰べる程、睦み合ッたも今は一昔。文三が某校へ入舍してからは、相逢ふ事すら稀なれば、

況て一に居た事は半日もなし。唯今年の冬期休暇にお勢が歸宅した時而已、十日ばかりも朝夕顔を見合はしてゐたなれど、小供の時とは違ひ、年頃が年頃だけに、文三もよろづに遠慮勝でよそ〳〵敷待遇して、更に打解けて物など言ッた事なし。其癖お勢が歸塾した當坐兩三日は、百年の相識に別れた如く、何となく心淋敷かッたが……それも日數を經る隨に忘れて仕舞ッたのに、今また思ひ懸けなく一ッ家に起臥して、折節は狎々敷物など言ひかけられて見れば、嬉敷もないが一月が復た來たやうで、何にとなく賑かな心地がした。人一人殖えた事ゆゑ、是れは左もあるべき事ながら、唯怪しむ可きはお勢と席を同した時の文三の感情で、何時も可笑しく氣が改まり、圓めてゐた脊を引伸して頸を据ゑ、異う濟して變に片付る。魂が裳抜れば一心に主とする所なく、居廻りに在る程のもの悉く薄烟に包れて、虚有縹緲の中に漂ひ、有る歟と思へばあり、無い歟と想へばない中に、唯一物ばかりは見ないでも見えるが、此感情は未だ何とも名け難い。夏の初より頼まれて、お勢に英語を教授するやうに成ッてから、文三も些しく打解け出して、折節は日本婦人の有樣、束髮の利害、さては男女交際の得失などを論ずるやうに成ると、不思議や今まで文三を男臭いとも思はず太平樂を並べ大風呂敷を擴げてゐたお勢が、文三の前では何時からともなく口數を聞かなく成ッて、何處ともなく落着て、優しく女性らしく成ッたやうに見えた。或一日、お勢の何時になく眼鏡を外して頸巾を取ッてゐるを怪むで文三が尋ぬれば、「それでも貴君が、健康な者には却て害になると仰ッたものヲ」ト言ふ。文三は覺えずも莞然、「それは至極好い事だ」ト言ッてまた莞然。

お勢の落着たに引替へ、文三は何かそは〳〵し出して、出勤して事務を執りながらも、お勢の事を思ひ續けに思ひ、退省の時刻を待詫びる。歸宅したとてもお勢の顔を見ればよし、さも無ければ落脱力抜けがする。彼女に何したのぢやアないのか知らぬ」ト或時我を疑ッて、覺えずも顔を赧らめた。

お勢の歸宅した初より、自分には氣が付かぬでも文三の胸には蟲が生た。なれども其頃はまだ小さく塲取らず、胸に在ッても邪魔に成らぬ而已か、そのムズ〳〵と蠢動く時は世界中が一所に集る如く、又此世から極樂淨土へ往生する如く、又春の日に瓊葩綉葉の間、和氣香風の中に、臥榻を据ゑて其上に臥そべり、次第に遠り往く虻の聲を聞きながら、眠るでもなく眠らぬでもなく、唯ウト〳〵としてゐるが如く、何とも彼とも言樣なく愉快ッたが、蟲奴は何時の間にか太く逞しく成ッて、「何したのぢやアないか」ト疑ッた頃には、既に「添度の蛇」といふ蛇に成ッて這廻ッてゐた……寧ろ難面くされたならば、食すべき「たのみ」の餌がないから、蛇奴も餓死に死んで仕舞ひもしようが、怒に卯の花くだし五月雨の、ふるでもなくふらぬでもなく、生殺しにされるだけに、蛇奴も苦しさに堪へ難ねて歟、のたうち廻ッて腸を噛斷る……初の快さに引替へて、文三も

今は苦敷なッて來たから、窃かに叔母の顏色を伺ッて見れば、氣の所爲か粹を通して見て見ぬ風をしてゐるらしい。

「若しさうなれば最う叔母の許を受けたも同前……チョッ寧そ打附けに……」ト思ッた事は屢々有ッたが、「イヤ〳〵滅多な事を言出して取着かれぬ返答をされては」ト思ひ直してヂット意馬の絆を引緊め、藻に住む虫の我から苦んでゐた……是れからが肝腎要、回を改めて伺ひませう。

第三回　餘程風變な戀の初拳入　下

今年の仲の夏、或一夜、文三が散歩より歸ッて見れば、叔母のお政は夕暮より所用あッて出た儘未だ歸宅せず、下女のお鍋も入湯にでも參ったものか、是れも留守、唯お勢の子舍に而已光明が射してゐる。文三初は何心なく二階の梯子段を二段三段登ッたが、不圖立止まり、何か切りに考へながら、一段降りてまた立止まり、また考へてまた降りる……俄かに氣を取直して、將に再び二階へ登らんとする時、忽ちお勢の子舍の中に聲がして

「誰方。」

トいふ。

「私。」

ト返答をして文三は肩を縮める。

「ヨヤ誰方かと思ッたら文さん……淋敷ッてならないから些とお嘶しに入ッしやいな。」

「エ多謝う、だが最う些と後にしませう。」

「何歟御用が有るの。」

「イヤ何も用はないが……」

「それぢやァ宜ぢやァ有りませんか、ネー入ッしやいヨ。」

文三は些し躊躇て梯子段を降果てお勢の子舍の入口まで參りは參ッたが、中へとては立入らず、唯鵠立でゐる。

「お這入なさいな。」

「エ、エー……」

ト言ッた儘文三は尙ほ鵠立でモヂ〳〵してゐる、何歟這入り度もあり這入り度くもなしといつた樣な容子。

「何故貴君、今夜に限ッてさう遠慮なさるの。」

「デモ貴嬢お一人ッ切りぢやァ……なんだか……」

「ヨヤマァ貴君にも似合はない……アノ何時か、氣が弱くッちやァ主義の實行は到底覺束ないと仰しやッたのは何人だッけ。」

ト蠖の首を斜に傾しげて嫣然片頰に含んだお勢の微笑に釣られて、文三は部屋へ這入り込み坐に着きながら

「さう言はれちやァ一言もないが、しかし……」

「些とお遣ひなさいまし。」

トお勢は團扇を取出して文三に勸め

「しかしどうしましたと。」

「エ、ナニサ影口がどうも五月蠅ッて。」

「それはネ、どうせ些とは何とか言ひますのサ。また何とか言ッたッて宜ぢやァ有りませんか、若しお相互に潔白なら。どうせ貴君、二千年來の習慣を破るんですものヲ、多

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook